

## [P1] 石狩川下流泥炭採取跡地における湿原植生再生モニタリング

坂元 直人<sup>○</sup> (株式会社エコテック)

渡辺 雅裕 (国土交通省北海道開発局札幌開発建設部江別河川事務所)

新庄 久尚 (株式会社エコテック)

笹森 健太 (株式会社エコテック)

矢部 和夫 (札幌市立大学)

### 背景と目的

北海道の石狩川下流域にはかつて総面積55,000haとなる日本最大の湿原が広がっていた。石狩湿原は美唄、幌向、当別篠津、対雁などのボグ(≒高層湿原の植生)が点在する複数の泥炭地の集合体であり、湿原生のスゲ類やミズゴケ類などが優占する広大なボグを形成していた。明治以降の開発により、石狩川下流域では1910年代までにフェン(≒低層湿原の植生)が消失した。1950～1960年代の農地開発や治水事業に伴いボグもほぼ消滅し、1983年には石狩平野に残存する湿原植生は119haとかつての0.2%にまで激減した。現在では美唄湿原や月ヶ湖湿原などに孤立したわずかな湿原植生が残るのみとなっており、これらの残存する湿原も地下水位の低下等による乾燥化が進行するなど、今後の存続が危ぶまれている。

石狩川下流の治水事業の一環として夕張川の流れを切り替えるため、幌向原野を開削し1936年に通水した『夕張川新河道』では、高水敷地表面に泥炭層が露出する箇所が残されており、泥炭採取地として活用されてきた。北海道開発局札幌開発建設部江別河川事務所では、この泥炭採取跡地にかつての湿原植生が残されていることに着目し、その生育環境を把握する①ボーリング調査、②地下水位観測および③植生調査を2010年から実施している。また、この確認を受け、国土交通省北海道開発局札幌開発建設部では地表面水位の安定化を図る対策工事を計画するとともに、流域住民や泥炭採取業者などとの連携のもと、かつて幌向地区に形成されていた湿原再生を目指している。

### 泥炭採取跡地での湿原植生再生の推移

2010年から開始したモニタリングの結果、泥炭採取跡地のうち、融雪水や雨水に由来する地表面水位の年変動が安定している箇所において、湿原植生の再生が進行していることが明らかとなった。2014年の調査では、夕張川新河道周辺において確認が途絶えていたホロムイクグ、エゾサワスゲなどの希少な湿原植物が自然再生していることを確認している。さらに、調査地对岸の泥炭採取跡地や流域近郊の江別太地区遊水地においてミズゴケ類が残存している箇所を確認できたため、それらの箇所の環境条件を把握する調査に着手している。

本報告では、泥炭採取跡地において湿原植生が自然再生した箇所と、調査地周辺でミズゴケ類が残存していた箇所における環境条件の類似性に着目し、今後のボグの再生に向けて整備すべき環境条件について報告する。



泥炭採取跡地に再生した湿原植生